

名古屋大学高等教育研究センター主催
2007 年度名古屋大学学生論文コンテスト
優秀賞

女子学生のジェンダー観と進路への影響

法学部 1 年 田中 香里

I. 研究の背景

(1) 女子学生の進路選択とジェンダー問題の関わり

大学在学中に、自分が大学卒業後どのような形で社会に出て行くかを考え、選択し、決定することは、大学生にとって非常に大きな課題である。特に、私たちのような女子学生は、就職、結婚、出産のことも視野に入れ、自分はいつまで仕事を続けていくのかなど、男子学生とはまた違った視点での問題を抱えることになる。このことから、女子学生の進路選択は、ジェンダー問題と深く関わっているといえる。

日本の男女平等の歴史は、1947年、男女平等が明文化された日本国憲法に始まる。平成11年には男女共同参画社会基本法、平成19年には改正男女雇用機会均等法等が施行されるなど、男女平等に関する法や制度の整備は、着実に進められてきた。男女平等をうたった憲法が誕生してから60年がたった今、大学生の抱えているジェンダー観とは、いったいどのようなものなのであろうか。また、彼らのジェンダー観は、彼らの進路選択にいかなる影響を与えているのだろうか。

今回の研究を通して、ジェンダーの専門家たちによる研究を知り、自分と同じ女子学生のジェンダー観について調査・分析することで、自らの進路を見出していく上での何らかの示唆を得ることができるだろう。また、現代の学生のジェンダー観を調査することによって、戦後進められてきた男女平等教育60年間の成果を垣間見ることができるはずであり、そのことも大変に意義のあることであろう。

これらに注目して、今回の研究・調査を進めていきたい。

(2) 先行研究

ジェンダーは、様々な表現で定義される概念であるが、本論文では「(生物学的な男女の差を意味する『セックス』に対して) 文化的、社会的な男女の差を指して言う言葉」という長谷川の定義を採用したい(長谷川三千子 2001, p. 193)。

「日本は、性別役割分業意識が特に根強く、しかも、これを支える社会構造になっている。この性別役割分業こそ、日本において事実上の平等を実現する上で、重大な障害になっている」(富岡恵美子 1995, p. 19)と富岡は述べる。総理府「男女平等に関する世論調査」では、「男は仕事、女は家庭」という考えに賛成(賛成およびどちらかといえば賛成)と回答した者の割合は、女性が55.6%、男性が66.7%で、反対(反対およびどちらかといえば反対)と回答した者は、女性が38.3%、男性が28.6%となっている(1992年)。性別役割分業観は、依然として強固であるという。この調査は1992年と少々過去のものだが、今回アンケートの対象とする大学生は、1992年当時、小学校入学前後の年齢であったはずである。自我形成上、大人から受ける影響は非常に大きい時期であるし、その当時の大人たちの意識がこのようなものであったということは、考慮すべき調査結果であるといえよう。

また、富岡は「性別役割分業は、労働を社会的労働と家事・育児・介護など家庭内労働とに分け…男女どちらも働いているのだけれど、社会的労働には報酬があり、家庭内労働には報酬なし、と決定的な違いがある…女性の従事する家庭内労働はタダ働きで、いくら一生懸命働いても、収入はもちろん権力や名誉にも縁がない」(富岡 1995, p. 22)と指摘する。つまり、性別役割分業は、収入・資産や権力などをもつばら男性に配分し、女性を経済的・社会的に従属させることになるのである。法の上では、たとえば育児休業法が改正され、男性も育児休業を取ることができるようになったわけだが、事実として

この制度は男性にはほとんど利用されていない。藤原曰く、「男性が育児休業を取得しない理由は、(財)子ども未来財団の「子育てに関する意識調査」(2000年)によれば、子育て層の男性は「仕事の量や責任が大きいため」66.7%、次いで「収入が減少し、家計に影響するから」57.8%、「職場で理解が得られないから」47.6%」となっており、「育児休業取得者に閉める男性の割合は2.4%」しか存在しないのだという(藤原千賀 2003, p.160)。また、子どもが成長した頃に女性が再就職しようと思っても、わが国には「M字型カーブ」現象の存在がある。「ひとたび会社をやめると、よほど運がよくないと、正社員として就職することはむづかしいことが多い。ほとんどがパートとしての採用であったり、派遣社員としての採用である」(馬場房子 2006, p.90)という。

II. 研究の目的と方法

これら先行研究を踏まえ、特に以下の点に注目してアンケート調査を行う。

第一に、今日の大学生にとってのジェンダー観の定義である。特に、「男女平等」などの言葉を聞いたときに思い浮かぶイメージは、男女の性差は認めつつも社会的な平等を目指していくという方向なのか、はたまた、そもそも性差そのものを完全に打ち消していくという方向なのか。私自身は、男女の生物学的な性差は事実として存在するのだから、その区別はつけたうえでの実質的な平等を目指していくべきだと考えているが、文献を読む中で、これは「男女平等」の絶対的な定義ではないのだとわかった。何をもち「男女平等」とするのかによって、問題の本質は大きく異なるはずであり、特に詳しく定義を見極めることが必要であろう。

第二に、ジェンダー観における「理想」と「現実」の相違と、それが進路に与える影響である。特に女性に関して言えることだが、彼女たちは「こうあるべきだ」「こうあってほしい」という「理想的ジェンダー観」と同時に、自分達が飛び立っていく社会を想像して「でも、実際はこうなのだろう」という「現実的(諦念的)ジェンダー観」をも持っていると考えられる。この二者間に本当に差異が存在するのか、存在するとしたらそれはどれほどの大きさなのか。

第三に、そのジェンダー観が、彼女たちの進路選択に与える影響である。理想と現実の差異が存在するならば、その差異は彼女たちの将来にどのような影響を与えるのだろうか。また、差異の有無によって、なにかしらの傾向のようなものは見られるのだろうか。

これらに重点を置き、今回は特に女子学生にスポットを当てて調査を進めていきたい。

III. 調査の結果と考察

名古屋大学女子学生 50 名を対象に、アンケート調査¹を行った。

(1) 男女平等の定義の方向性

まず、この研究の大前提として、現代の女子学生が考える「男女平等」とはどのようなものであるか、

¹ () は本論文での項目番号、【】はアンケートの項目番号を示している。各質問項目の詳細については、本論文の最後にある参考資料を参照して頂きたい。

おおまかな傾向を調査した。

[図1]

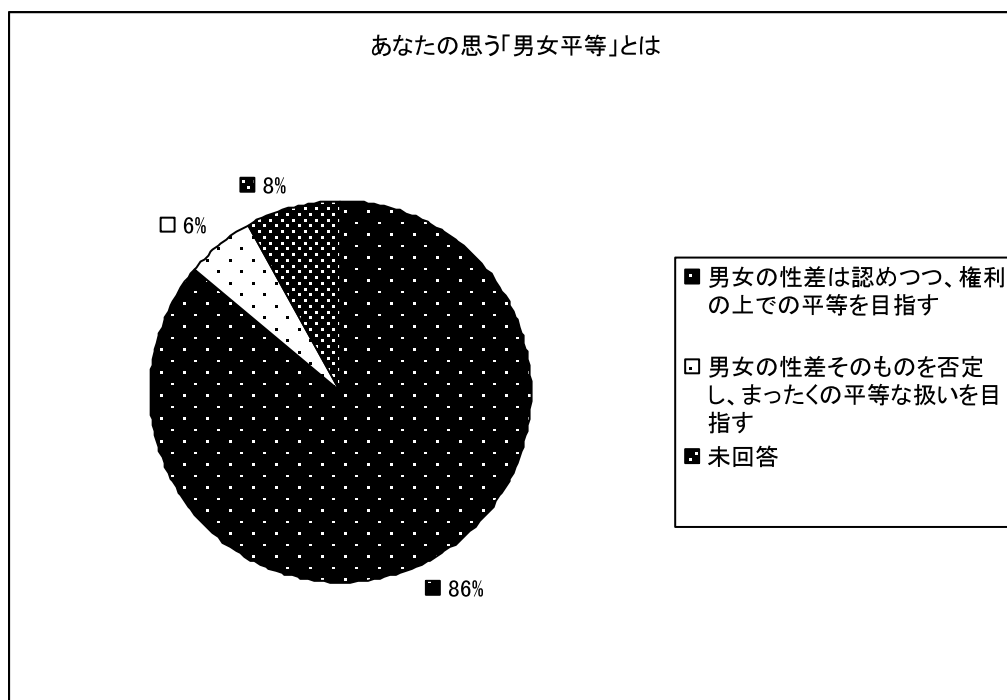


図1が示すとおり、「男女の性差は認めつつ、権利の上での平等を目指す」ことが「男女平等」である、と考えている女子学生が大部分を占めるということがわかった。そこで、今回の研究における「男女平等」の定義は、上記のような方向性を持つものとして、以下の調査を行うことにする。

また、「男女の性差は認めつつ」と「権利の上での平等」という文言に表されているのは、具体的にはどのようなことであるのか。これについては、この後の調査を行っていく中で、より詳しい定義を突き詰めていきたいと思う。

(2) 理想的ジェンダー観

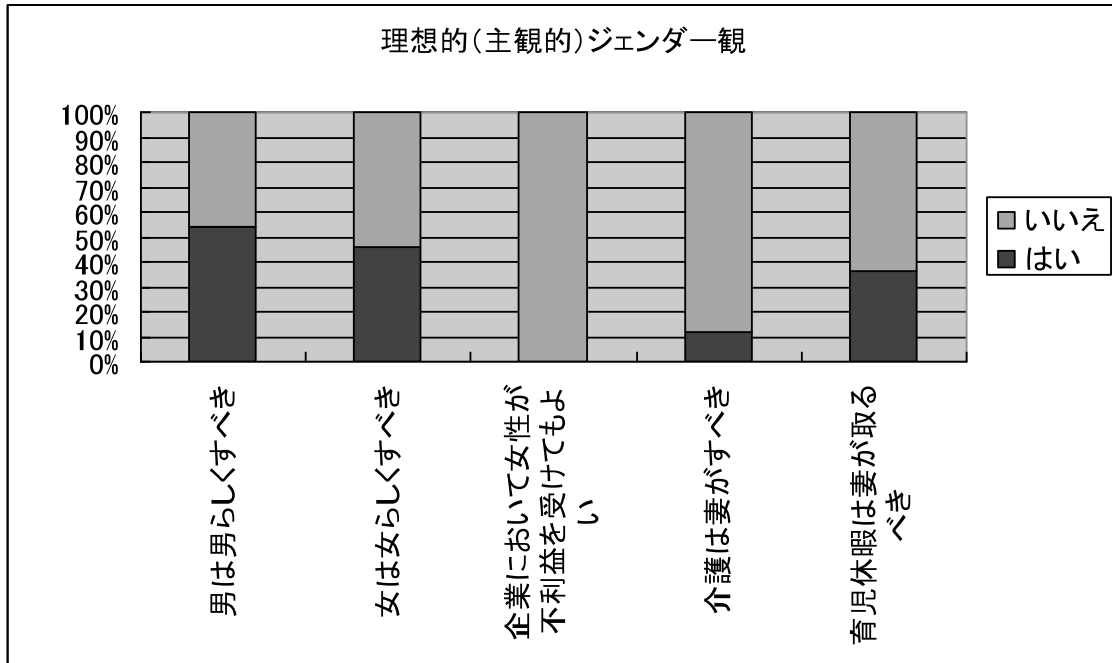
具体的項目を挙げ、女子学生の理想的（主観的）なジェンダー観について調査²した。

図2を見てまず目に付くのは、「男は男らしくすべきだ」と考えている女子学生が50%以上いるということ、そして驚くべきことに、「女は女らしくすべきだ」と回答した女子学生も、半数とはいかないまでも、それに近い割合で存在するということである。男性に「男性らしさ」を求める女子学生が多いのは、女性としての、男性に対する希望が含まれているのかもしれないと考えられるが、自分たち女性に対しても「女性らしさ」を求める女子学生が、このように高い割合で存在しているということは、アンケートをとるまではまったく予想していなかった。これだけを見ると、女子学生の半数が、前時代的・男女差別的なジェンダー観を持っているようにも感じられる。しかし、「企業において、女性であることを理由に不利益を受けても、別に構わない」と考えている女子学生が0名であったことや、「親の介護は、夫ではなく、女性である自分がすべきだ」と回答した女子学生が約1割しか存在し

² 以下の質問すべてに共通して、「はい」「どちらかといえばはい」をまとめて「はい」、「いいえ」「どちらかといえばいいえ」をまとめて「いいえ」とカウントする。

ないことから、単純にそうではないということは明らかである。

[図2]



また、「共働きをしていたとしても、夫ではなく、女性である自分が育児休暇をとるべきだ」と考える女子学生が「親の介護は、夫ではなく、女性である自分がすべきだ」と回答した女子学生の約3倍いるということにも注目したい。【2】は選択肢に丸をつけてもらう形式の質問だったのだが、余白に意見を書いた女子学生が数名おり、それらは「母親が常に近くにいることは、子どもにとって必要である」、「自分の産んだ子どもなのだから手を離れるまでは自分で成長を見たい」というようなものであった。「育児」に対する女子学生たちの意識は、ほかの問題とはまったく違う、特殊な概念を持つものであるようだ。

(3) 現実的ジェンダー観

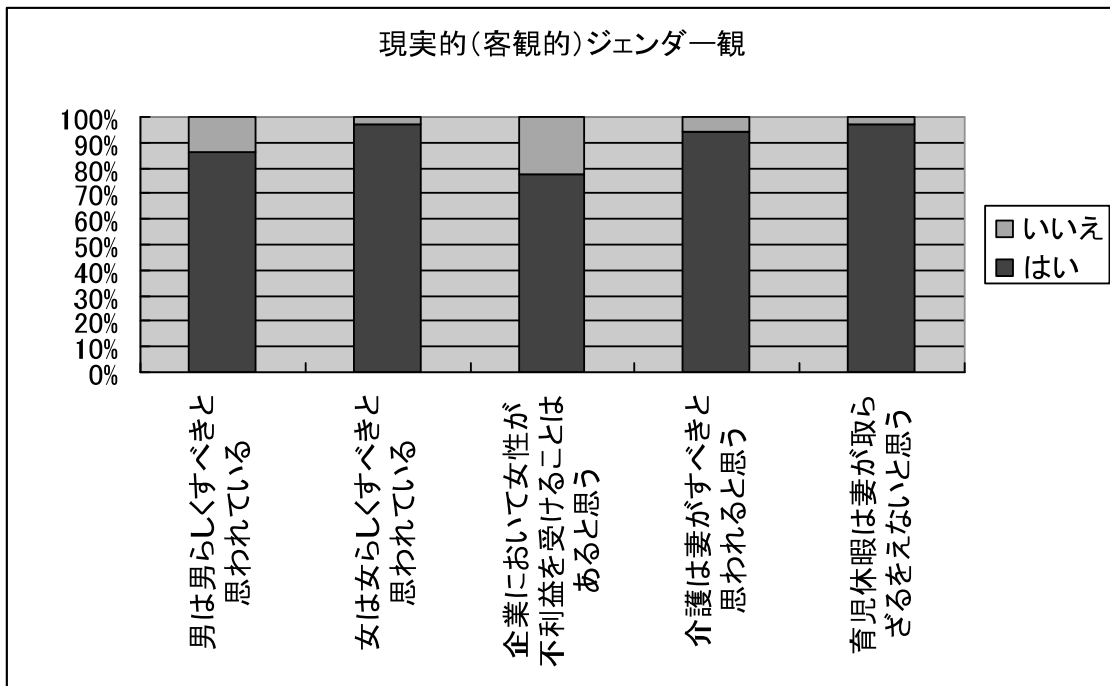
次に、具体的項目を挙げ、女子学生の考える「世間の」ジェンダー観、現実的（客観的）なジェンダー観について調査した。

ここでは、どの項目に対しても、非常に高い割合で「はい」という回答が出た。特に「企業において、女性であることを理由に不利益を受けることは、あると思う」と回答した女子学生が約8割おり、【2】の回答と重ねて考えると、女性だからといって不利益を受けるのはおかしいと思うが、事実としてそういうことはあるのではないかと考えている女子学生が、多く存在するということになる。やはり、理想と現実とのギャップを予想している女子学生は少なくないようだ。

また、【2】では「男は男らしくすべきだ」という回答が、少しではあるが「女は女らしくすべきだ」より多かったのに対して、ここでは結果が逆転している。図3には反映されていないが、「世間では、男は男らしくあることが求められている」という項目で多かったのは「どちらかといえばはい」という回答であったのに対し、「世間では、女は女らしくあることが求められている」という項目では圧倒的に「はい」という回答が多かった。やはり女子学生は、女性のほうが、性別による偏見

を受けることが多いと感じていると考えられる。このあたりからも、女子学生が世間に対して厳しいまなざしを持っているということがわかる。

[図3]



(4) 「ギャップ型」と「一致型」

図4は、【2】「理想的ジェンダー観」と【3】「現実的ジェンダー観」で、「はい」（もしくは「いいえ」）と答えた個数の差を集計したものである。

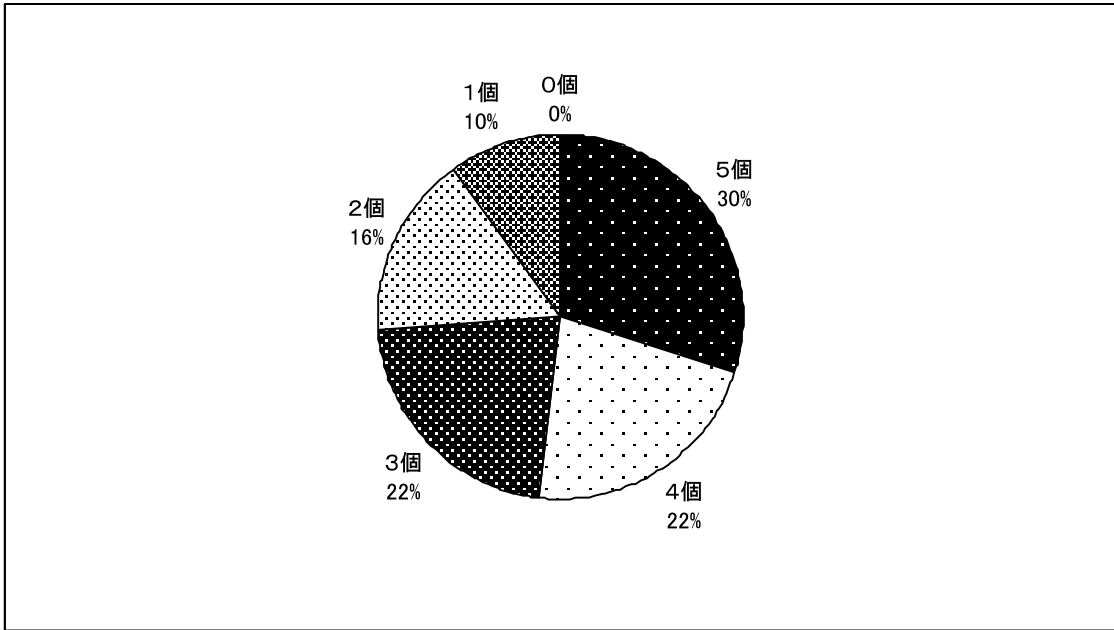
ここで、「理想的ジェンダー観」と「現実的ジェンダー観」の間に差がある者と、差がない者とを2グループに分け、それぞれ「ギャップ型」「一致型」と分類³する。

図5は、図4を、「ギャップ型」と「一致型」の割合で示したものである。グラフを見ると、やはり先行研究のところで予想した通り、「理想的ジェンダー観」と「現実的ジェンダー観」の間には溝が存在していると感じている女子学生（＝「ギャップ型」）は多く、全体の4分の3を占めているということがわかる。

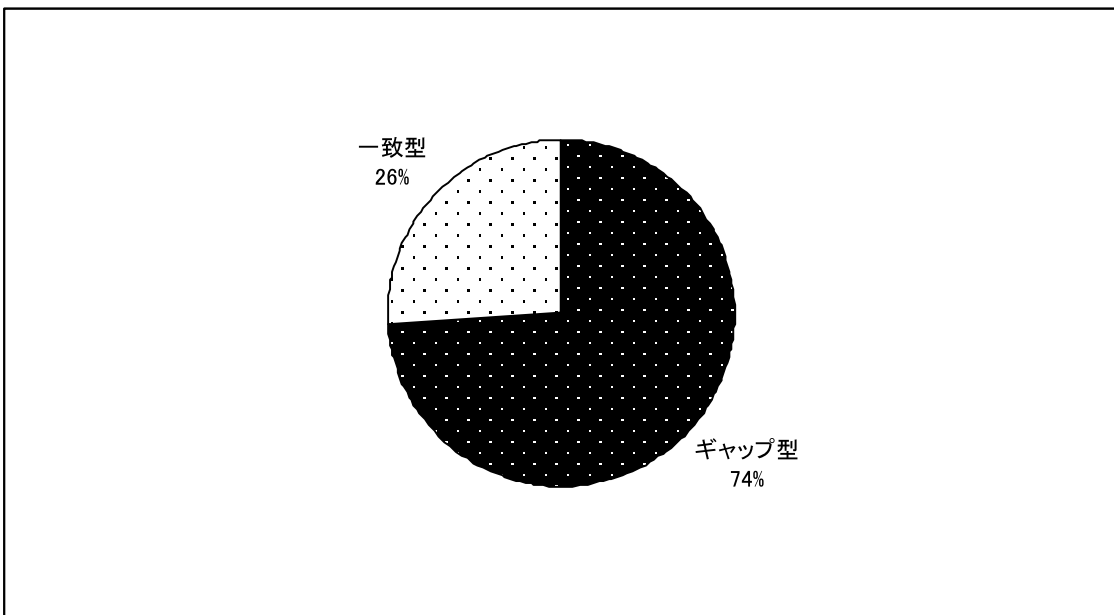
ここで興味深いことは、「一致型」の内容である。「ギャップ型」と「一致型」の違いは「理想的ジェンダー観」ではなく「現実的ジェンダー観」で出る、つまり、現実社会の認識の違いによって現れるというのが、アンケート集計前の予想であった。しかし実際にアンケートをとってみると、【3】の回答からわかるとおり、「ギャップ型」と「一致型」の「現実的ジェンダー観」の認識はほとんど共通していたのだ。では、なにが「ギャップ型」と「一致型」の差を生んだのかというと、一番の原因は、意外にも「一致型」の女子学生の、ある意味で性別役割分業的な「理想的ジェンダー観」だったのである。

³ 具体的には、「はい」（もしくは「いいえ」）と答えた個数が【2】（理想）と【3】（現実）でいくつ違うかを集計し、差が「5個」「4個」「3個」だった女子学生を「ギャップ型」、「2個」「1個」「0個」だった女子学生を「一致型」と分類するという方法を用いる。

[図 4]



[図 5]



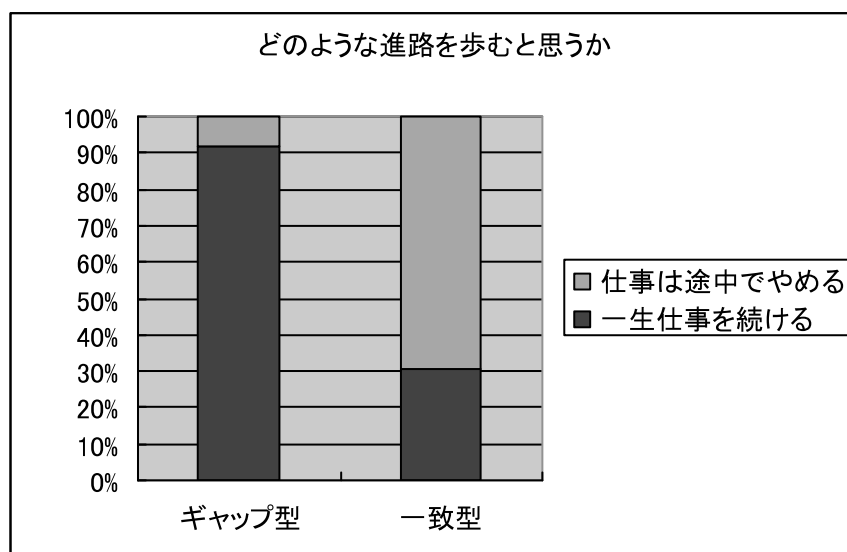
(5) 卒業後の進路

次に、大学（もしくは大学院）卒業後、自分はどのような進路を歩むと思うかを調査した。ここでは、本人の希望のみではなく、社会の実状もイメージした上で回答してもらった。なお、「仕事には就かず、家事手伝いまたは結婚して家庭に入る」と回答した学生は0名だったためグラフからは省くが、この項目を選択した女子学生が0名だったということからも、女子学生の社会進出意識の強さが伺える。

図6を見るとわかるとおり、グループによって大きな意識の違いがあることが明らかとなった。「ギャップ型」の女子学生は、ほとんどが「仕事に就き、（結婚・出産等をしたとしても）ずっと仕事

を続ける」と回答したのに対して、「一致型」の女子学生は、3分の2が「仕事に就くが、結婚・出産等をしたら、仕事を辞めて家庭に入る」と回答したのである。

[図6]



アンケートをとる前の予想は、「理想」と「現実」の溝を強く感じている「ギャップ型」の女子学生は、女性が（結婚・出産等をしたとしても）ずっと仕事を続けるということの困難さを考えた結果、仕事を続けたくても諦めてしまう、という傾向があるのではないかというものであった。しかし実際は、むしろ「ギャップ型」の女子学生のほうが、「仕事に就き、（結婚・出産等をしたとしても）ずっと仕事を続ける」と回答している率が高かったのである。一生仕事を続けたいと考える女子学生たちは、仕事に対して、予想よりはるかに高いモチベーションを持っているようだ。

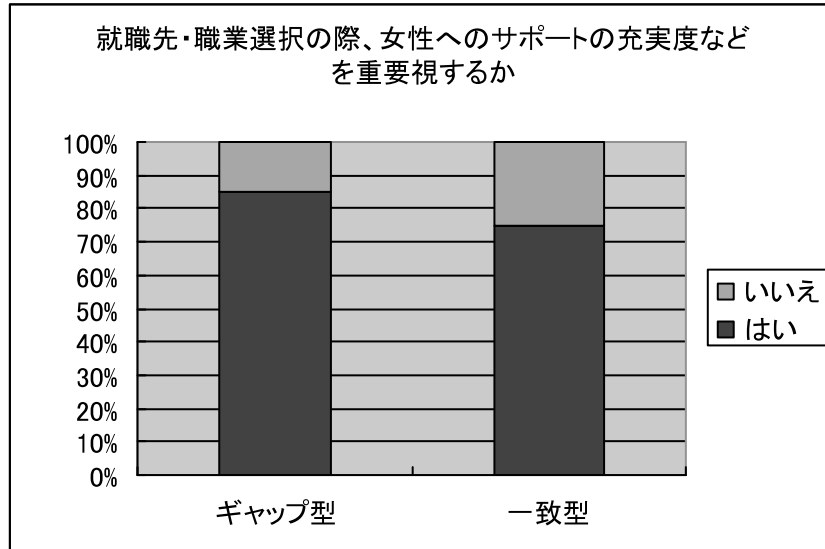
「一致型」の女子学生の3分の2が「仕事に就くが、結婚・出産等をしたら、仕事を辞めて家庭に入る」と回答した理由については、のちほど分析する。

(6) 自分が女性であることへの意識

次に、【4】で「仕事に就き、（結婚・出産等をしたとしても）ずっと仕事を続ける」と回答した女子学生に、就職先や職業を選択する際に、「女性へのサポートが充実している」や「男女の差があまり問われない」など、『自分が女性である』ことが関係する項目を重要視すると思うかを調査した。

図7を見ると、「ギャップ型」・「一致型」ともに、約8割の女子学生が「はい」、つまり、就職先・職業選択の際に女性へのサポートの充実度などを重要視する、と回答していることがわかる。このことから読み取れるのは、女子学生は、「一生仕事を続けていこうと思ったら、女性に対して理解のある企業を選択したり、実力があれば性差などは問題にならないような職業に就いたりすることが必要である」と感じているということである。男女平等の時代と言っても、女子学生が自らの性別をまったく意識せず自由に職業を選択できるわけではない、少なくとも、女子学生たちはそう感じているということがわかる。

[図7]

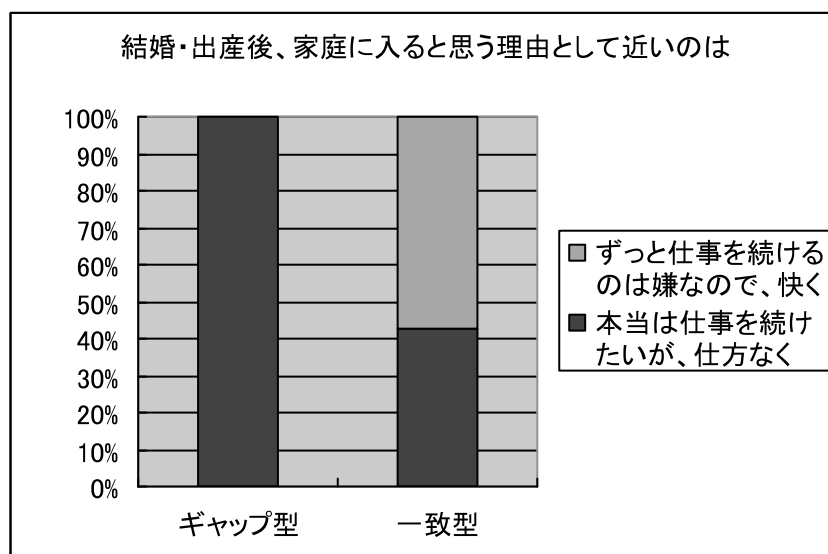


(7) 積極的退職・消極的退職

次に、【4】で「仕事に就くが、結婚・出産等をしたら、仕事を辞めて家庭に入る」と回答した女子学生に、なぜ仕事をやめようと思うのかを調査した。

図8を見れば明らかであるが、グループによって非常に顕著な差が出た。「ギャップ型」の女子学生は全員が「本当は仕事を続けたいが、共働きは負担が大きいのので、仕方なく辞める」と回答したのに対して、「一致型」の女子学生は、半数以上が「ずっと仕事を続けるのは嫌なので、結婚・出産等を辞めるきっかけにする」と回答している。当然のことだが、女子学生全員が一生仕事を続けたいと思っているわけではなく、家庭を作るという道に生きがいを見出す者も多く存在している。そしてそれは、ある意味とても伝統的な考えであるとも言える。このことは、【4】において、「一致型」の女子学生の3分の2が「仕事に就くが、結婚・出産等をしたら、仕事を辞めて家庭に入る」と回答した、大きな理由のひとつと考えられるだろう。

[図8]

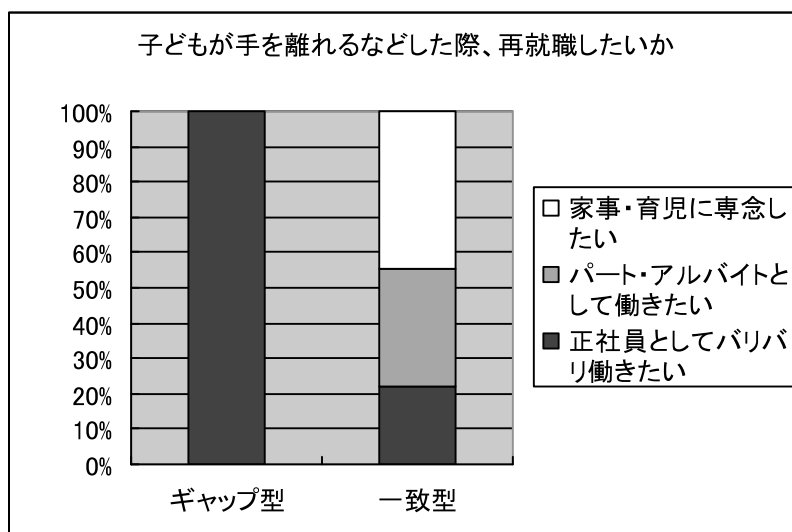


(8) 再就職の方向性

次に、【4】で「仕事に就くが、結婚・出産等をしたら、仕事を辞めて家庭に入る」と回答した学生に、子どもが大きくなって手を離れたらしたら、また働きたいと思うかどうかを調査した。

ここでも、グループによって大きな違いが現れた。「ギャップ型」の女子学生は全員が「正社員としてバリバリ働きたい」と回答しているが、「一致型」の女子学生にもっとも多かった回答は「家事・育児に専念したい」、次が「パート・アルバイトとして働きたい」であり、「正社員としてバリバリ働きたい」という回答は約2割にとどまった。

[図9]

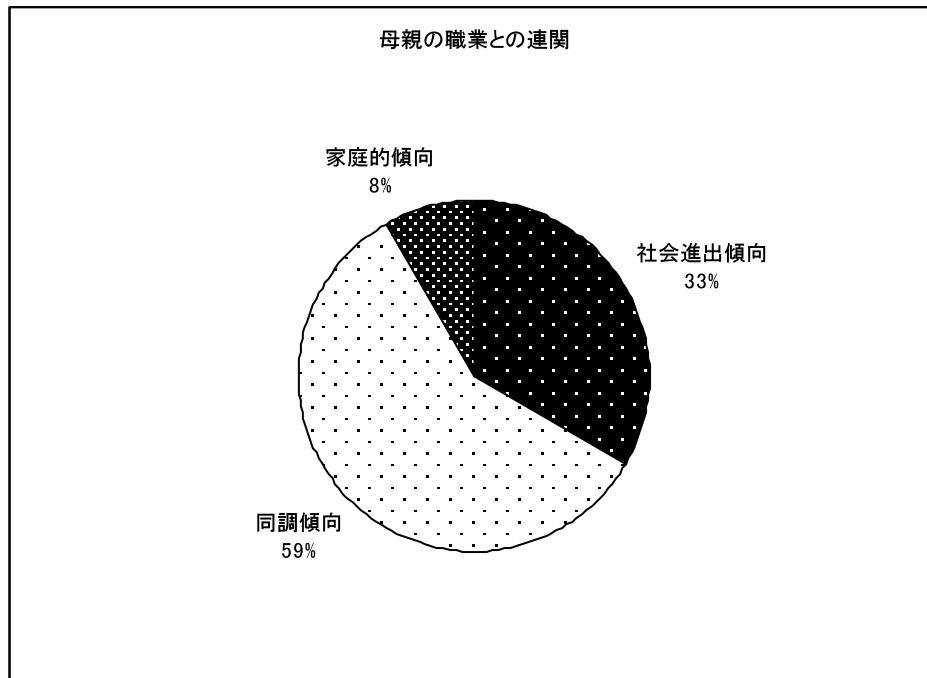


(9) 母親の影響

ここで、(8)の結果と母親の職業とに関連があるかどうかを調査した。「正社員」「パート・アルバイト」「専業主婦」の順に社会進出的であると、母親の職業より【6-2】の回答が社会進出的であれば「社会進出傾向」、同じであれば「同調傾向」、【6-2】の回答より母親の職業の方が社会進出的であれば「家庭的傾向」とする。

結果、最も多かったのは「同調傾向」(約6割)、次が「社会進出傾向」(約3割)、最も少なかったのが「家庭的傾向」(約1割)であった。母親の姿を見ながら成長した女子学生は、母親と同じか、もしくは母親よりももっと社会進出を果たしたいと考えているようである。予想では、例えば正社員の母親を持つ女子学生が、母親にはもっと家庭にいてほしいと感じていて、自分の子どもにはこのような思いはさせまいと考えた結果「家庭的傾向」となる、というパターンが多いのではないかと考えていた。というのも、【2】で余白に書かれていた意見にもあったように、「母親が常に近くにいることは、子どもにとって必要である」と感じている女子学生が少なからず存在していたためである。しかし実際は、むしろ母親より社会進出的でありたいと感じている女子学生の方が多いという結果になった。正社員やパート・アルバイトの母親を持つ女子学生たちは、母親が専業主婦でないことに対して不満を持つことはあまりないようである。むしろ彼女たちは、自分たちの母親を、母親というより、自分と同じ一人の女性個人として捉えているように感じられる。

[図10]



(10) 現代の女子学生の考える男女平等

(1) において、男女平等を「男女の性差は認めつつ、権利の上での平等を目指す」ものであると定義した。この定義の「男女の性差は認めつつ」という部分に関して、【2】のアンケート結果からは、各々の性別の持つ特性を蔑ろにすることはない、という意味合いがあるということが読み取れる。また、全体を通してみると、男女の生物学的な違いは受け止め、その上での、アフーマティブ・アクション的な平等を求めているのではないかと考察できる。つまり、機会の平等より、結果的な「権利の上での平等」を求める傾向にあるということだ。いくら法や制度だけ整えても、【3】や【5】のアンケート結果に不安・不満が表れているように、形式的な平等では意味がないのである。

本論文では、これをもって、現代の女子学生の考える男女平等の定義としたい。

IV. まとめ

本論文では、現代の女子学生のジェンダー観と進路の関係について考察してきた。女子学生のジェンダー観の「理想」と「現実」の差異を利用してグループ分けをしたことで、進路に関するいくつかの興味深い傾向が明らかにできた。しかし、今回の調査は、女子学生の意識・想像の範囲にとどまり、実際の企業のデータ分析等にまで踏み込むことはできなかった。また、名古屋大学に在籍する女子学生のみ調査対象を絞ったため、かなり偏った結果が出ているとも予想される。以上二点に関しては、今後の課題としていきたい。

■参考文献

- 伊田広行（2004）『はじめて学ぶジェンダー論』、大月書店
- 武石恵美子（2006）『雇用システムと女性のキャリア』、勁草書房
- 富岡恵美子（1995）「男女平等の現状と問題点」、富岡恵美子・吉岡睦子（編）『日本の女性と人権 世界から見た日本の男女平等』、明石書店
- 日本心理学会（編）（2000）『ジェンダーの病 気づかれぬ家族病理』金子書房
- 長谷川三千子（2001）「してはいけないジェンダーフリー」、川本敏（編）『論争・少子化日本』中央公論新社
- 馬場房子（2006）『働く女性の心理学[第2版]』白桃書房
- 藤原千賀（2003）『ワーキング・ウーマンの現状』角川書店

ジェンダーに関するアンケート

母親の職業⇒専業主婦（非就業）/正社員/パート・アルバイト

【1】あなたの考える男女平等は、次のどちらに近いですか。

- A. 男女の性差は認めつつ、権利の上での平等を目指していく
- B. 男女の性差そのものを否定し、まったくの平等な扱いを目指していく

【2】あなたの主観・希望で回答してください。

(1) 男は男らしくすべきだ

----- はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ

(2) 女は女らしくすべきだ

----- はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ

(3) 企業において、女性であることを理由に不利益を受けても、別に構わない

----- はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ

(4) 親の介護は、夫ではなく、女性である自分がすべきだ

----- はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ

(5) 共働きをしていたとしても、夫ではなく、女性である自分が育児休暇をとるべきだ

----- はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ

【3】客観的に回答してください。

(1) 世間では、男は男らしくあることが求められている

----- はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ

(2) 世間では、女は女らしくあることが求められている

----- はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ

(3) 企業において、女性であることを理由に不利益を受けることは、あると思う

----- はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ

(4) 親の介護は、夫ではなく、女性である自分がすべきだ、と思われると思う

----- はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ

(5) 共働きをしていたとしても、夫ではなく、女性である自分が育児休暇をとらざるをえないだろうと思う

----- はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ

(裏面に続く)

【4】大学（もしくは大学院）卒業後、あなたはどのような進路を歩むと思いますか。こうしたという希望のみではなく、社会の実状もイメージした上で、回答してください。

- A. 仕事に就き、（結婚・出産等をしたとしても）ずっと仕事を続ける
- B. 仕事に就くが、結婚・出産等をしたら、仕事を辞めて家庭に入る
- C. 仕事には就かず、家事手伝いまたは結婚して家庭に入る

【4】でAと回答した人にお聞きします。

【5-1】就職先や職業を選択する際に、「女性へのサポートが充実している」や「男女の差があまり問われない」など、『自分が女性である』ことが関係する項目を、あなたは重要視すると思いますか。

はい・どちらかといえばはい・どちらかといえばいいえ・いいえ

【4】でBと回答した人にお聞きします。

【6-1】結婚・出産後、共働きをせず、家庭に入るとする理由として近い方を選んで下さい。

- A. 本当は仕事を続けたいが、共働きは負担が大きいため、仕方なく辞める
- B. ずっと仕事を続けるのは嫌なので、結婚・出産等を辞めるきっかけにする

【6-2】子どもが大きくなって手を離れたりしたら、また働きたいと思いますか。

- A. 正社員としてバリバリ働きたい
- B. パート・アルバイトとして働きたい
- C. 家事・育児に専念したい

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。（法学部1年 田中香里）